

# さくら



令和5年6月19日(月)

## ペットと暮らすこととは



我が家にやって来た時から、「クック、クック」と不思議な鳴き声を出していたので「クク」と名付けました。ククは雌のヨークシャーテリア。

帰宅して玄関ドアを開けると、必ずそこにククはいました。断尾された短い尻尾をブンブン振りながら、家族の帰りを待っていてくれたものでした。

家族が仕事で疲れているときは、陽気で元気なククはいつも皆を励ましてくれました。家族が体調を崩して寝込んでいるときは、布団の側まで来て、心配しているようにも見えました。ククは家族の一員であり、私たちにとってはなくてはならない存在でした。

しかし、ククと一緒に過ごす時間は限られていました。犬が年をとるスピードは、犬種によって違いがあるものの、人間の数倍です。10歳を過ぎた頃から、ククの動物病院へ行く回数は増えていきました。人間と同じように歯が抜け、目は白内障になり、ヨタヨタと歩いていました。白内障が進行してからは、よく屋内の壁などにぶつかっていました。それでも、「クク、おいで」と声をかけると、尻尾をブンブン振りながら声のする方向にやってくるのでした。

歩くことがおぼつかなくなった頃には、バギーに乗せて散歩に行きました。目がほとんど見えなくなっていたからでしょうか、外に出かけると、鼻を上に向け、季節のにおいをかいでいたことを思い出します。

その後、ククは15歳まで家族と一緒に過ごしました。そしてある日、ククは天に召されました。私たち家族にとっては、とても悲しい日でした。しかし、ククと過ごした日々は、いつまでも忘れることはないでしょう。

先日、獣医さんから次のように聞きました。「ここ2年ほど、コロナの状況下で飼い始めた犬や猫を、飼育放棄する人が増えている。」その理由は、からだが大きくなると聞いていたのに大きくなってしまった、散歩に行くのが面倒、飼い主の指示どおりにならないなど、人間の勝手な理由だそうです。そのような飼い主たちは、ペットをどんな存在としてみているのでしょうか。

犬や猫、そしてすべての動物には命があります。私たちは、どのような命も大切にしなければなりません。飼った限りは、飼い主にはペットの最期(さいご)を看取(みと)る責務があります。その覚悟のない人には、ペットと暮らす資格はありません。

学校ホームページで、日々の教育活動のようすを公開しています。どうぞ、本校ホームページを閲覧してください。

